

天
盆

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～26頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

これは、かつてどこかにあった国での物語。
今残る、いかなる記にも残されていない国での物語。

一

陳兵が街に攻め入ってきたと声があったが、少勇はそれどころではなかった。借金を帳消しにできる額を賭けた賭け天盆に勝ちそうだったのだ。百五十手を超える大熱戦であった。盆所に、通りの騒ぎが届いてくる。少勇の熱戦を取り囲んで見ていた者がちらほら、通りを見に行く。泣きそうな顔で盆を睨んでいた小役人の越磊は、これ幸いと一緒に立ち上がった。泣きさせてなるものかと少勇は、越磊の首根っこを掴んで座らせようとするが、越磊とて小役人、大金を払わずにすむならばと騒ぎに乗じて逃げようとする。

盆所の奥の中庭へ陳兵が押し入ってきて、後は祭りの騒ぎである。中庭の天盆はことごとくひっくり返され、殴り合い、掴み合いの嵐が吹き荒れる。

少勇は、逃げる越磊を追って通りに出るが、通りはもはや戦か祭りか分からぬ様相。果たしてきちんと敵と殴り合っているのかも分からぬ乱闘の合間に見える越磊の背中を追って、少勇は駆ける。逃がしてなるものか、と夜の通りを右から左。どこぞの馬鹿が花火を上げたようで、どん、どん、と光が上がる中、人を掻き分け駆ければ、前から人が飛んでくるのをかわす、陳兵へと傍にいた見知らぬ若造を蹴りつける、殴られそうになるのをよけて泥溜まりに足を突っ込む、しているうちに越磊の背中を見失い、顔に傷はできるわ、着物は破れるわ、河原に降りてせいぜいと腰を下ろす。

河に月光が映っている。対岸の北街ほくがいからも騒ぎが風に乗って聞こえてくる。河原にひっくり返って倒れている男がいた。無事かと聞けば、陳兵を投げたら腰を抜かした、と返ってくる。馴染なじみの大工だった。

「お前の嫁を見たぞ」

「どこでだ」

「お前の嫁は相変わらずいい女だな」

「おい、どこでだ」

「謁者橋だ。役所へ出前と言っていた」

「俺が先だ」三人の陳兵のうち、最も大きな男が言う。

謁者橋のたもととの河原、三人の陳兵が囲んでいるのは、一人の女である。

自分をねめつけてくる隣国の兵を、切れ長の目で見返している。気づかれぬように、ふう、と息を吐く。まったく男は、と眩くと、目をさらに細めて横目に陳兵を見遣った。

「いやだわ。私そっちの人がいい」と、女は後れ毛をなおしながら一番背の低い陳兵を指差す。指差された陳兵は喜び、残り二人が慄然となる。手前調子に乗るな、と内輪揉めを始めると、橋の上から、集合だ、早くしろ、と声がかかる。

見上げれば、兜を被り槍を携えた陳兵が欄干から手招きしている。畜生、と声を残しながら三人の陳兵が去っていくと、呼びかけた陳兵は女のところへと河原を降りてくる。兜を脱げば少勇であった。

「おい、子供たちは大丈夫か？」

「私の心配はどうした」と、静が腰に手を当てて言う。

「無事か、静」

「助けるなら、もっと勇ましく助けられないの」静は口を少し尖らせる。

「残念だが、人には人の天分がある」

よくこんな臭いものを被っていられる、と少勇は兜を放り捨てる。ぼたん、と水面に波が広がる。

「暴れ好きな客がいたから大丈夫と思うけど。一龍もいたし。でも、早く戻らないと」

帷子かたびらを脱ぎ捨てた少勇に、静は懐ふところから包みを取り出す。

「土花しいかの葉を買いに寄っていたら遅くなってしまうて。発作が起きたの」

「よく金があったな」

「ちっとは稼いできてよ」

少勇は思い出して地団太を踏む。「今日稼げる予定だったんだが、くそ、見失った」

「どうせ賭け天盆でしょう」

「どう稼ごうが、金は金ではないか」

言いながら、少勇は河原を登ろうとしたが、静は立ち止まったまま。どうした、と振り返る少勇に、聞こえない？ と静。二人でしばし、夜の河原に耳を澄ます。

赤子の声だ。

少勇と静は声の元を捜して、辺りを見渡す。果たして、橋の下の闇に目を凝らすと、粗末な布にくるまれた赤子が捨て置いてあった。

静が近づいて橋の下へと屈かがんで見れば、目を開けて、小さな手を握ったり開いたりしている。

橋の裏に反射する河の月明かりを掴もうとしているようだった。誰が捨て置いたか分からないが、このままここにあれば、朝までもたぬであろう。

赤子は、揺れ惑うまばゆい光を掴もうと、手を伸ばして戯たむれている。

少勇が静の後ろから、赤子を覗き込む。

どうする、と静は聞く。

少勇は赤子の頬を指でなでると、立ち上がって頭を掻く。静を見て、こう言った。

「いまさら一人増えたところで、変わりゃあしない」

少勇は、笑っていた。

おお、と橋や土手から声が上がる。

少勇と静は、声につられて空を見上げる。

天に、大きな箒星ほうきぼしが、青白い尾を引いて流れ去るところであった。

三

凡天ぼんてんと名づけられた赤子は、十二人の兄と姉の下ですくすくと育った。五人の兄、七人の姉は、上から順に名に一から数字がつけられていた。面倒だと、少勇しょうゆうが天盆てんぼんにちなんだのである。天盆てんぼんの升目ますめの数え方にちなみ、十一番目には「土」の字が、十二番目には「王」の字が与えられた。ところが天盆てんぼんは縦十二横十二ゆえ、十三番目に与える字がなく、少勇は前夜の越磊ちよらいへの怒り余って、凡手の凡の字を与えたのであった。

少勇は大工であった。腕はよかったが時勢柄現場も少なく、もっぱら盆所で賭け天盆てんぼんに勤いそんでいた。では生計をいかに立てていたかといえは、静しずが年長の子らと共に食堂を切り盛りして日々の糊口ここうを凌しのいでいたのであった。凡天は、食堂に集い来る庶民徒党の笑い声怒声を子守唄に育った。

「久方振りの陳攻にしても、これだけ攻められ放題とは」

「戦好きは、我らの専売特許というのに。白翁と十二将が天で嘆いておられるわ」

「もともと武人に拓かれた国だという誇りを失っておる」

「最近の若い衆は軟弱すぎる。もつと野蠻なくらいがちょうどええんじゃ」

応応、と常連の爺共が杯を合わせる音が、八卓ほどの食堂に響く。そこへ三鈴、四鈴、五鈴の

三姉妹が麵を運ぶ。いずれも年頃の娘であるが、姿かたちはまるで違ふ。残念ながら見目に恵ま
れていないところだけが見事に共通している。が、本人たちはまるで頓着しておらず、愛嬌溢
れる口ぶりで爺共に話しかける。

「家の甕にでも隠れていたくせに」と小柄な三鈴。

「老い先短いんだから先陣切って最後の役に立ちなさいよ」と細長い四鈴。

「ダメよ。この百楽門食堂になけなしのお金ぜんぶ吐き出してからじゃないと」とまるまる太
った五鈴。言い終えて、三姉妹はからからと快活に笑う。一緒に、言われた爺共もひいひいと笑
い転げる。

外を、騒ぎが通り過ぎた。血気盛んな者達が人を集めながら北街に繋がる橋へと向かっている
のであろう。陳攻を退けて以来、毎日のように見られる光景であった。

「都への復興費工面の陳情は、またなしのつぶてか」爺が麵を啜る。

「いつものことよ。陳との境にあるこの東塞で工面せよと。蓋の国の東端で陳の矢面に立つ我ら
にその言い種よ」

「せめて東塞が一丸となるべきじゃのに、北街の商人やら小役人はまた南街を踏み台にして、北街の復興を優先する始末じゃ」

そんな爺談議の隣の卓で、二日酔いの少勇が突っ伏している。おかつば頭の少女九玲が水を置く。水を飲む少勇を、九玲の背中でぐらぐら揺れながら凡天が興味深そうに見ている。

「あれが件の赤子か」

戻っていく九玲の背中を見ながら、爺の一人が少勇に話しかける。少勇は答えず、碌に目も開けずに水を飲んでいる。

「全く、子を働かせておいて主は夜通し賭け天盆か」

「借金の取り立ても容赦ないというに。三軒隣の魚屋は一族みな奉公に出て散り散りじゃ」

「油断すればすぐに同じ末路よ」

「お主のところは子も多いのに、主が働きもせず、育てもせず、この有様ではな」

「育ててなどおらぬ」と、次々喋る爺に頭痛で顔をしかめながら少勇が応える。「いっしょに飯食っているだけだ」

「では農らも家族か」

「そういうことだ。ついてはどうだ。家族のよしみで金を」

「断る」

がははは、と爺共の笑い声がまた上がると、店の外から、大漁大漁と賑やかな声を上げながら、帷子のお化けが二匹入ってくる。お化けがどさりと帷子を地面に落とすと、果たして七角と八角

の兄弟であった。その二つの坊主頭には、さらに兜かぶとがある。腕には籠手こて。

「少勇、街の東でまた見つけたぞ」

「歓楽街の河沿いにはまだあるぞきつと」

身に纏まとったものを次々に地面に脱ぎ捨てながら、嬉しそうに報告する齒欠けの坊主二人は泥まみれで異様な臭いを放っている。爺共は鼻をつまみながら、地面の泥だらけの戦利品をいぶかしむ目つきで見遣る。

「陳の遺留品を買う奴などおるのか」

「闇市に流せば、陳のものとは分からぬ逸品になって北街の武家の蔵に収まるだろうさ」少勇が卓から顔を上げずに言う。

「いくら闇市でも好んでは買い取るまい。目をつけられたら終わりじゃからな」

「足元を見られて二束三文がオチよ」

爺は鼻で笑うが、突っ伏したままの少勇の様子に、は、と思に至る。

「お前、六麗ろくれいに売りに行かせるのか」

「商あきまいに長けた娘は持つものだ」

「あれは商いの才とは言わん」

「商人に好かれ、商談をまとめるは商いの才だ」

爺共は呆れる。あれは娼婦の才だろうが、とはさすがに口に出さない。静せいも三姉妹も奥にいる。その時、外で罵声ばせいが轟とどろいた。いくつかの悲鳴と、とっくみ合うような噪音が続く。かと思うと、

店の中に男が吹っ飛んできた。男は卓に激しくぶつかり、その上にあつた麵は盛大に飛び散つた。男はなおも止まらずごろごろと地面を転がり、泥だらけの防具へ激しくぶつかつて、泥が食堂中に撒き散らされる。男が防具に埋もれてがくりと意識を失うと、入口から、別の男が入つてきた。まだ少年が終わりかけているほどの年頃なのに、惚れ惚れするような体軀であつた。への字に結んでいた口を開き、少勇に告げる。

「千獄せんごくの使いだそうだ。土花しつかに手を上げようとしやがつた」

その肩には、小さな女の子がいた。ぼさぼさの赤茶髪あかの女の子は、吊り上がった目で、担ぐ少年以上のへの字口で、小さな手足をばたばたとさせている。まるで倒れている男に飛びかからんとする鼻息である。

「一龍いちりゅう兄、下ろしてよ」土花は一龍の頭をびちびちとはたく。一龍はおいおい、と落ちそうになる土花を両手で支える。

嵐の去つた食堂にいたのは、泥まみれになつた爺共であつた。麵は、地面で新しい泥料理と化している。あまりの出来事にしばらく目を白黒させていたが、ようやく、爺共が口を開く。

「ここは食堂じゃろうが」

「なんちゆう野蛮な」

「親のしつげがなつておらん」

彼らが非難の目を向ければ、少勇は、卓に伏したまま寝ていた。

四

季節がひと回りし、またひと回りするにつれ、街はそれでも以前のように平静を取り戻していた。

ところが、季節がもうひと回りした夏の頃、家族の中で不思議なことが起こるようになった。食堂の裏の家の中で、よく物が動くのである。ここに置いておいた茶碗はどこに行った、と誰かが言い出す。誰も知らない。ところが、しばらくすると他の茶碗と同じところで見つかる。またある時、ここにあった筆はどこだ、と誰かが言う。誰も知らない。しかしやはり、他の筆と一緒にのところにある。

「なんか、すっきりしてない？ 最近家が」三鈴、四鈴、五鈴が声を揃えて言う。

下手人に気づいたのは、九玲だった。九玲は優しい女の子で、凡天の面倒を一番よく見ていた。九玲は、凡天が誰かの脱ぎ捨てた着物の帯を他の帯のところへ引きずっているのを見たのである。「整理整頓好きの童とは小生意気だな」

少勇は呆れて言った。じゃあ片付けは凡天にさせよう、と七角と八角は面白がって物を放置したままにすれば、凡天は神妙にまた楽しそうに、ままならぬ四肢で運ぶのであった。

ただ、それだけでは済まなかった。

「ここに置いていた花瓶はどこ？」静が腰に手を当てて言う。

「俺の独楽がない」「いや俺の独楽がない」「馬鹿言え。俺の独楽だ」「俺のだ阿呆」と七角八角が騒ぐ。

「手毬てまりがなくなったあ」と土花が泣き散らす。

凡天は、小物に飽き足らなくなると、次第に少し大きな物まで、人の目を盗んで動かすようになっていた。ひとつしかない物は、勝手に動くところにあるのかが分からなくなる。凡天を詰問してもつづらな瞳で見返してくるばかりであるから、しばらく他の兄妹も巻き込みながら探すと家の中のまるで違った場所に置かれている。花瓶は家の入口からかわや厠かわやに。独楽は小棚の上から床板の下に。手毬は花瓶の中に。なぜそんなところに、という場所から見つかるのである。

困り果てた挙句に見つかった物を憤懣ふんまんやるかたなしの形相ぎようそうで元の場所に戻そうとする兄妹を、しかし止める者がいた。

「その場所の方がいい」

そう言ったのは、末の妹王雪おうせつであった。凡天より三つだけ年上の末妹は、盲目だった。いつも家で見つとしていて大層大人しかったが、その滝のようにまっすぐに長い黒髪をまとった子に兄妹は一目も二目も置いていた。

「王雪が言うなら、そうしよう」

七角八角は普段は見せぬ従順さで、王雪の言に従い、独楽で遊んでも床板の下に戻すようになった。すると、また季節がひとつ移る頃であろうか、独楽がもうひとつ増えたのである。実のところは単に河原で拾っただけなのであるが、七角八角は顔を見合わせた。

「やっぱり王雪の言うことは正しい」

その七角と八角が、食堂の裏、家の中庭で天盆を睨みつけている。同い年のこの二人の男児は双子のようにいつも行動を共にし、いつも諍いあっていた。

少勇の家訓は、「諍いの白黒は天盆でつけるべし」であった。ことあるごとに兄妹は家の中で天盆を挟んだ。見届け人は、たいていその傍らで転がっている凡天であった。

「同い年なのに、なぜお前が『七』角なのだ」

七角という名を争って、七角八角は天盆を挟んでいた。七角と八角の名は、これまで何度も入れ替わっていた。支障がなかったのは、たいがいにおいて二人一緒に呼ばれるからである。さて勝負はといえば、歳も同じ、負けん気の強さも同じ、そそっかしさも同じ、盆上の勝負は一人が失手をすればもう一人が失手を返す、互いに一步も譲らぬ接戦であった。

「早く指せ。降参か」

「うるさい。神手は時が指すのだ」

失手に次ぐ失手でもはや泥沼と化した盆上を二人が睨む。そこへ二秀が「借金取りだ」と二人を呼びに来て、盆を見ると「これは乱戦だな」と苦笑いする。二秀と七角八角は他の子に合流し、食堂で空腹貧困病弱の愁嘆を演じると、借金取りは客の罵声に押し出されるように退散していく。

やれやれと裏手に戻り、いざ決着をと二人天盆を挟んで座り直す。しばらく二人盆上を睨んでいると、「ん？」と七角が声を上げる。

「一手進んでないか」

「三九麒麟きりりんなんて俺は打っておらん」

怪訝けげんな二人に、二秀が覗き込む。

「この手は、八角が見つけたのか」

「見つけておらん」

「では誰だ」

「誰と言うても分からんわ。ここにおったは凡天くらいじゃ」

「打っておらんなら戻せ」と言う七角に、八角はしばし盆上を眺めると、「いやじゃ。俺の手はこれじゃ」と言う。わあわあと言いが始まる。

二秀は、傍らではたばたと小筆を運ぶ凡天を見遣る。

五

「よいか。天盆とは、この蓋がの国固有の盤戯ばんぎである。分かるか」

三歳になった凡天ぼんでんは、あーと二秀にしゅうに答える。二秀が先日の話を告げると、少勇しょうゆうは「そりゃいい。あいつもお前くらい天盆に通じれば、出世できるかもしれんぞ」と天盆教授を二秀に申し付けたのであった。

「なんで僕まで」と凡天の隣で十偉じいが齒の抜けたところを指でかきながら言う。

「蓋に生まれたなら、天盆をできなくては立身できぬぞ」

二秀はそう言うと、木製の盆を置いた。平たい真四角の盆である。縁が盛り上がっていて、その中に縦横の直線が彫られている。その直線によって、盆の上に十二×十二の升目が広がっていた。

「本来の天盆は、黒曜石こくようせきという石でできているのだ」まあ、お前たちも一度くらいは見る機会があるかもしれぬな、と傍らの布袋を手に取る。

盆の上に、布袋から四角い駒をばらばらと出した二秀が、そのうちひとつを二本の指で美しい所作でつまみ上げる。駒も木製で、平たい真四角をしていた。二秀の細い指に挟まれて、そこには文字が刻まれているのが見える。

「帝てい。この駒を取られたら、負けだ」

馬ば、衆しゅう、麒麟きりん、獅子しし、鳳凰ほうおう、と並べていく。

「ほかのこれらの駒で、相手の帝を獲りに行く」

駒を並べ終えて、「最初はこのように並べて始めるのだ」と十偉に反対側を並べさせる。凡天はうーうーと嬉しそうに眺めている。十二段のうち、一段目から四段目までに二秀の駒が、九段から王段までに十偉の駒が正反対に並び揃った。

「まず、礼をする」

お願いします、と二秀は頭を下げる。十偉も慌てて、真似をする。その横でさらに真似する凡

天が頭を床にぶつける。

「これらの駒はそれぞれ違う動き方をする。たとえば衆は前に一つしか動けん」と、二秀は四四の衆を、四五に動かす。「やってみろ」と言われ、十偉は九九の衆を九八に進める。「これが一番弱い駒なの？」と問う十偉に、弱い強いではない、と二秀は答える。それぞれの駒にそれぞれの働きがある。「すべての駒に意味がある。古くからある天盆の格言だ」

ひとつひとつ駒の動きを教えながら、二秀と十偉は交互に駒を進める。己の駒で、敵の駒を取ることができる。敵陣に入ったら駒を裏返すのだ、成なりって、駒の動きが変わるのだな。その都度二秀がそう実地で示してゆくのを、十偉は眉をひそめながら真似てみる。その繰り返しで盆上はたどたと進んでいく。

二秀が、十偉から取って脇に置いておいた麒麟の駒を、盆上に打ち込んだ。

「ずるい。その駒もう外に出たじゃないか」十偉が口を尖とがらせる。

「天盆では、相手から取った駒をまた使うことができるのだ」

ずるい、と恨めしそうに繰り返す十偉を、二秀が諭さとす。「あらゆる駒がまた、何度でも、盆上に蘇ることができる。すべての駒に意味があるということだ」

納得できないように顔をしかめる十偉は、お返しとばかりに己が取った駒を盆上に打ち込んでみるが、あっさりと二秀に取られた。あつという間に、十偉の帝が動く場所がなくなる。

「これで詰みだ」

十偉が顔をしかめて帝を動かそうとすると、「そこには獅子が効いている」と二秀は動かして

見せる。十偉はますます眉間を皺しわだらけにする。

「よいか、十偉、凡天。天盆において最も大事なことは、負けたら『参りました』と相手にはつきりと言うことだ」

言ってごらん、と促されると、十偉は目を丸くして、「練習じゃないの」と文句を垂れる。

「練習でも、負けたら言うのだ」二秀はにべもない。「天盆は礼を重んじる盤戯だ。負けたら潔いさぎよく宣言する。それが蓋の国の人間の凜然であり義勇なのだ。分かるか」

分からん、と十偉は口を歪ゆがめる。二秀は座したまま十偉が参りましたと言うのを待っていたが、やがて横から「まいりました」と凡天が嬉しそうに言った。両手を叩いて、ばんばんと足を踏みならしている。

「お前、なんで嬉しそうに参りましたって言ってるんだよ」十偉は嬉々としている凡天に呆れる。まいりました、まいりました、と連呼する凡天に、うるさいうるさい、と口を塞ふさごうとする十偉を面白そうに見ていた二秀であったが、ふと、

「そう言えば、凡天が言葉話すのを聞いたことがあったかな」

十偉はその言葉に手を止めて、二秀と見合う。楽しそうな凡天を見て、十偉は鼻白んだように、
眩くらく。

「初めて喋った言葉が『参りました』って、お前」

それから、十偉じいと凡天ぼんてんの対局の音が、毎日鳴るようになった。十偉は六歳離れた凡天に面白いように勝てるのが嬉しく、ご飯がすめば凡天を天盆の前に引っ張っていく。ところが凡天も嫌ではないらしく、毎日毎日、幾度となく負けるのにもかかわらず楽しそうに駒を鳴らしている。

「十偉、凡天はまだ小さいんだから勝たせてあげてよ」と九玲きゅうれいが言うと、「天盆に歳は関係ないもん、な、二秀にしゅう兄」と十偉は意に介さない。それどころかあまりに凡天相手に楽勝が続くゆえに「もう二秀兄より強くなったのでは」と思い込んで二秀に挑み、一局で完膚なきまでに敗北して、半泣きになりながら凡天を探す、ということもしばしばであった。

「衆しゅうひとつ持ってたって、もう無理だぜ」凡天相手に、また十偉は威勢づく。

「すべてのこまにいまがある」凡天はかたことに言う。

「言葉だけ覚えてたって勝てるもんか。衆なんて価値ない、突き捨てるだけの駒さ」十偉は意気揚々と指し進める。

ところが季節がふたつほど過ぎた頃、十偉が急に天盆をやめた。

二秀が聞いても機嫌が悪そうにただ「天盆は嫌いだ」と答えるだけ。が、二秀の裾を引っ張る者がいた。王雪おうせつである。

「十偉は凡天に勝てなくなったのよ」王雪は目を閉じたまま笑んでいる。

「まさか」

「本当よ。この前、盆をひっくり返していたもの」

盆を確かめると、なるほど端に小さな傷がついている。あれほど楽しそうだった十偉を吐りつけるのもどことなく忍びなく、二秀は思案の末、九玲きゅうれいを呼び出した。

「凡天と天盆を一局交えてみて欲しい」

九玲は玉のような笑顔で承諾したが、あくる日、玉のような笑顔で二秀のところへ来た。

「あっといふ間に負けてしまいました」

まことか、と驚いた二秀が確認すると「凡天はすごく楽しそうに天盆を打つのです」と嬉しうにころころと笑った。

ならばと、食堂の厨房からくすねた肉汁を啜すくっている七角しちかくと八角はっかくを二秀はつかまえる。凡天を

天盆で負かしたら菓子をやろう、と。

「兄者あにじや、請け負ったぜ」

「あんな小僧に負けるはずないだろう」

「あんな餓鬼がきに負けるなんて十偉もまだ餓鬼だな」

二秀は、昔の三九麒麟を思い出す。

「偶然だろ」

「偶然だろ」

七角と八角は声を揃えて言う。

「ま、偶然かな」

二秀もそう呟く。

あくる日、七角と八角は帰ってきた二秀を待っていた。

「勝ったぜ」

「楽勝だったな」

「お前はけっこう接戦だった」

「お前こそ際どかった」

「今日も打っていいのか？」

「今日も勝ったらまた菓子くれるのか？」

「勝ち続けている限りは」

二秀は、請け負った。

「やっただ。これで、一生菓子に困らねえ」

だが、二人が菓子を二秀から貰えたのは、ひと月だけであった。はじめに八角が敗れ、ほどなく七角も敗れた。菓子の褒美ほうびがなくなっても、負けず嫌いの二人はむきになって勝負を繰り返した。

季節がひと回りする頃には、二人はほとんど負けるようになってしまった。

「六麗、久方振りに天盆をしてみないか」

二秀は、雨上がりの中庭を眺めている六麗に声をかける。六麗は長い黒髪を肩にかけたまま振り返る。はらはらと、肩から髪がこぼれる。

「二秀兄。あたしはもう二秀兄には勝てませぬよ」

小さく口元だけで六麗は笑う。

「違う。凡天と対局してみたいのだ」

六麗は目を丸くした後、思い当たるように今度は目を細めた。

「七角と八角も負かしたとか」

二秀は頷く。

「一龍兄を除けば、君が最も強い」

「天盆士を指す二秀兄を除けば」

六麗は雲間からもれる日を見上げる。

「いつ奉公に出るかもしれない身、家にいるうちに末っ子と戯れておこうかな」

こうして六麗と凡天は、天盆を挟んで座る。脇には、二秀と土花。土花は、このところ凡天が天盆を打っているのをいつも傍で見ている。病を持つ体なのにじっとしていることのない土花に

しては珍しく、凡天の対局は飽かず眺めている。

「土花はまだ天盆は分からぬだろう」

「分らないけど、凡天が面白いんだもん」ぶっくりした頬を膨らませた土花が、欠けた歯を見せながら笑う。

お願いします、と両者頭を下げ、凡天が先手を指す。六麗は、終始微笑みを浮かべながら、凡天が指すとすぐに次の手を指す。早指しなのに、優雅である。凡天も、考えているのかいないのか、次々とべちべち駒を動かしていく。勝負をしているというより、純然と駒を動かすのが楽しいという風情である。

二秀は初めて凡天の対局を見たが、まっとうな指しまわしに感心していた。教えてもいないのに、定跡じやうせきを自然に打っている。七角や八角ではまずやらぬような、序盤で帝の囲いをつくり置く手筋も当たり前のように出てくる。なるほどこれでは弟妹では歯が立たぬかもしれぬ、それにしてこの歳でここまでの指し手ができるとは、と懐手をしてひとりごちていた矢先。

中盤にさしかかるかからぬか、六麗が定跡を逸脱する手を置いた。凡天から取って持ち駒としていた馬を、凡天陣深くに打ち込んだのである。

えげつないことをする。

二秀は内心、肝きもを冷やす。この手、受けを誤れば凡天陣は堰せきを切ったように食い荒らされる攻め手だ。二秀は、六麗が己にはない大胆さをもち、時折こうした奇手を放つことを知っていた。六麗は、年端としはもいかない凡天を試しているのである。さすがに商人たちを手玉にとる妹だと二秀

は目を細める。

さて、どうする凡天。と凡天を見れば、打ち込まれた馬をしばし凝視していたかと思いきや、そこから目を盆全体へと転じ、何もなかったかのよう^にに敵陣へと衆を進めた。

受けぬのか。というより、攻め合うつもりか。

六麗も意表をつかれて口をすぼめるが、すぐに微笑みが、前よりも少し大きく戻る。

そこから、中盤はなく終盤に一気に雪崩^{なだ}れ込む盆面となった。もはやどちらが先に帝を仕留めるか、の攻め合いである。六麗も凡天も、誤ることなど気にせぬようにぼんぼんと手を重ねていく。勝敗を分かっ刃上の手をこともなく指し合う。

六麗が敵陣で成った成鳳凰^{なりほうおう}を、凡天の帝の喉元につきつける。次手が六麗に渡れば、詰^つみとなる。必死である。

凡天は、この手番から間断なく帝を攻める帝首^{ていしゆ}を続けて詰ませることができなければ、負けだ。凡天の手が、止まった。

駒が入り乱れた難しい盆面。二秀は沈黙していた。

凡天の勝ち筋が、あったからである。だが凡天がそれに気づくか。二秀は見えていた。

七角や八角では気づかぬだろう。六麗が気づいているかも分からぬほどの詰め手筋だ。やがて凡天は、持ち駒^{ほくしや}の卜者を、六麗陣深くに打ち込んだ。

二秀が読んだ勝ち筋の手であった。

「参りました」

六麗は頭を下げた。ああ、久方振りにこの言葉を使ったわ、とさっぱりと言う。

「あの子、面白い子ね。土花が好きになるのも分かるわ」

夕刻、凡天が寝ついた後、六麗は二秀にそう話した。

「君も凡天が気に入ったか」

「あたし、別に天盆好きじゃないのよ。女が天盆覚えても得にならないし」

六麗は、でもね、と続けた。

「天盆を打っていて楽しいと思っただのは初めてだったわ」

あの子と打っていると、なんだか自由な感じがしたの。

六麗は月を見上げて、嬉しそうにそう呟いた。

「あとは三姉妹か」二秀は、ひとりごちた。

「あら面白そう」

「嫌よ面倒なもの」

「じゃあ、三人一緒だったらどう？」

食堂を静と切り盛りする三鈴、四鈴、五鈴の同年三人姉妹は、そう答えた。三対一か、と思

ったものの、それも面白かろうと二秀は、休憩中の三人を天盆にかじりついている凡天のもとへ

連れていく。

「この臣、取ってしまいましょうよ」

「嫌よ取ったら相手の思うつぽよ」

「じゃあ、こっちをこう攻めたらどうかしら」

「ふふん、そんな帝首効くわけないわ」

「ちよっと何この手、厳しいわね、帝危ないじゃないの」

「じゃあ、こちらに逃げてみましょよ」

かしましい三対一の天盆は、やはり最後もかしましく終わった。

「参りました」

「参りました」

「参りました」

かくして凡天は、二秀と天盆を挟むこととなったのである。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。